

* 田中館愛橘晩年の写真

田中館愛橘はアーカイブ新聞に何度も登場している。天文学が専門ではなかったが関係の深かった人である。1856年(安政3年)南部藩士の子として生まれ藩校に学んだ後、1878年(明治11年)に東京大学理学部(のち帝国大学理科大学)に入学。在学中は菊池大麓(数学者、東京帝国大学総長、学習院院長、京都帝国大学総長、理化学研究所初代所長等を歴任)、山川健次郎(物理学者、東京帝国大学総長、京都帝国大学総長、九州帝国大学の初代総長などを歴任)に師事し、ユーイングに電磁気学、メンデンホールに地球物理学を学んでいる。

1882年(明治15年)に東京大学理科物理学科を第1期生として卒業し準助教授に就任。1883年(明治16年)に助教授。1888年(明治21年)、公費でイギリス・グラスゴー大学のケルビン卿のもとに留学した。ベルリン大学を経て、1891年(明治24年)にアメリカ経由で帰国、東京帝国大学理科大学教授に就任し多方面に業績を残した。

地球物理学者で初代緯度観測所長木村榮の師でもある。日本天文学会機関紙天文月報1959年7月号の表紙(写真1)には木村榮と田中館愛橘のツーショットとして掲載されたこともある。ところが、この写真の木村榮と写っている人物はのちに田中館愛橘ではなく、岸上鎌吉博士ということが判明している。木村榮と写っている人物は田中館愛橘ではなく岸上鎌吉(きしのうえかまきち)であるという指摘は、2014年2月に国立科学博物館で開かれた平成25年度「黎明期日本天文史研究会」で国立天文台水沢VLBI観測所の亀谷收氏が「国立天文台水沢での木村榮手紙特別展と田中館愛橘と思われた写真の誤りについて」という講演を行い、田中館愛橘と書かれた人物は別人で「岸上鎌吉」氏だと指摘した。亀谷氏は、2013年が木村榮没70年にあたる行事で、ご遺族から資料を預かった中に、天文月報1959年7月号の表紙の写真があり、詳しく調べ、写真の裏のメモ書きに「岸」、「鎌」という字が判読できたこと、またアーカイブ室新聞第22号(2008年6月13日)の「先の記念写真は寺尾寿教授在職満25年祝賀会とわかる」に掲載された初代東京大学東京天文台長、初代日本天文学会会長であった寺尾寿東京大学教授在職満25年祝賀会の

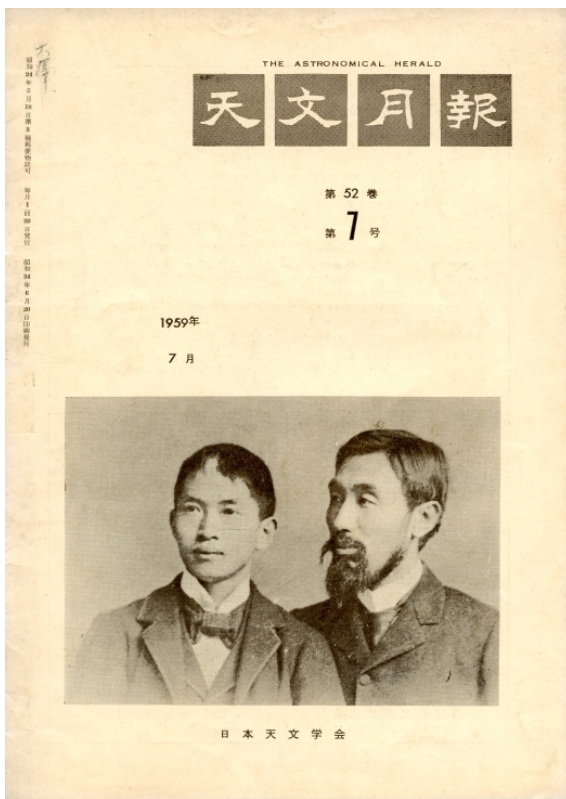


写真1

1959年7月号の表紙(写真1)には木村榮と田中館愛橘のツーショットとして掲載されたこともある。ところが、この写真の木村榮と写っている人物はのちに田中館愛橘ではなく、岸上鎌吉博士ということが判明している。木村榮と写っている人物は田中館愛橘ではなく岸上鎌吉(きしのうえかまきち)であるという指摘は、2014年2月に国立科学博物館で開かれた平成25年度「黎明期日本天文史研究会」で国立天文台水沢VLBI観測所の亀谷收氏が「国立天文台水沢での木村榮手紙特別展と田中館愛橘と思われた写真の誤りについて」という講演を行い、田中館愛橘と書かれた人物は別人で「岸上鎌吉」氏だと指摘した。亀谷氏は、2013年が木村榮没70年にあたる行事で、ご遺族から資料を預かった中に、天文月報1959年7月号の表紙の写真があり、詳しく調べ、写真の裏のメモ書きに「岸」、「鎌」という字が判読できたこと、またアーカイブ室新聞第22号(2008年6月13日)の「先の記念写真は寺尾寿教授在職満25年祝賀会とわかる」に掲載された初代東京大学東京天文台長、初代日本天文学会会長であった寺尾寿東京大学教授在職満25年祝賀会の

記念写真(写真2)の木村榮の一人において右側の人物が田中館愛橘に酷似した人物を発見し、これをもとに木村榮と写っている人物は岸上鎌吉と同定し間違いを指摘したのである。



写真2 木村榮と田中館愛橘が写った寺尾壽の祝賀会記念写真の一部

天文月報の表紙の写真でさえ、このような間違いが生じる。今回入手した写真は、「天文台記録写真百年史用」というファイルにあったもので、田中館愛橘の晩年の写真(写真3)と肖像画の写し(写真4)である。

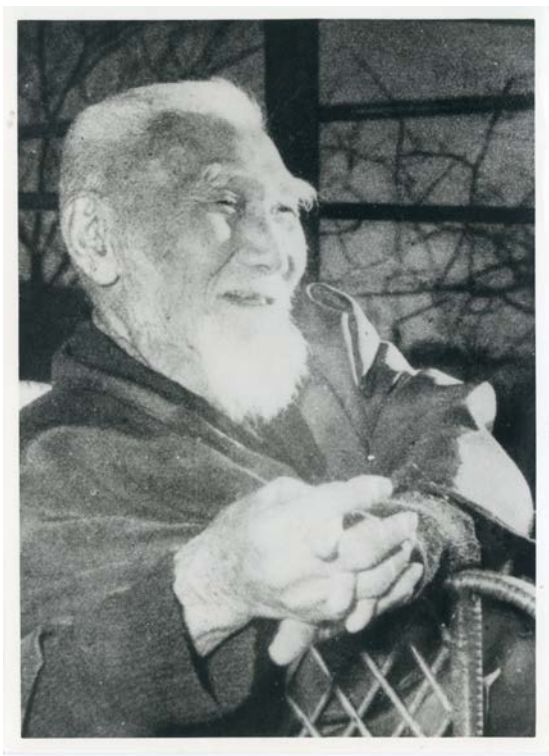


写真3



写真4

田中館愛橘は文化勲章受章者でもある。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arenaoj@pub.mtk.nao.ac.jp